

## 「港南台九条の会 8月例会」

2019年08月26日

「港南台九条の会」は、毎月第四土曜日の午前10時から「港南台地区センター」で、例会を開いている。参加者たちが順番に、自分の体験から、戦争と平和に関する思いを「平和の語り部」として語り合ってきた。憲法九条という、いささか厳めしいテーマであるが、近隣に住む顔見知りの者たちが、平和について、思いの丈を気軽に語っている。一般市民が「語り部」として語り、それに応答し合う集会は、平和を身近に捉えることができる。これらの語りを「平和のバトン」と題した小冊子にまとめてきた。10人の語りを1集にまとめ、第4集まで出している。「平和のバトン」は、語りを読み易いように簡潔にまとめであり、平和を求める率直な市民の声が著わされている。草の根の市民運動として、貴重な積み重ねになっていると思う。例会では、語り部と共に、時々、講師を招き、テーマを持った学びの会も行っている。8月24日の例会は、九条かながわの会事務局代表の岡田尚弁護士を迎え、「九条をめぐる情勢と私たちのできること」と題した講演会を持った。

岡田弁護士は、三点から話された。①「参院選の結果をどう見るか」改憲を目指す自民党は、参院選の争点の5番目に改憲を上げていたが、選挙中、徐々に改憲テーマを語らなくなった。一方、社民党や共産党は、改憲阻止の訴えを強めていった。結果、改憲勢力は3分の2を切った。市民共闘・野党共闘は成果があった。分析によると、支持政党を持たない無党派層が「安倍政権」を変えようと動いた傾向がある。「憲法守れ」の「3,000万署名」運動の継続が、市民連合の進める野党共闘の下支えになったと評価できる。②「アベ改憲の新局面とこれに対する闘い」アベ改憲は、「解釈改憲」「立法改憲」と進め、「明文改憲」を目指している。しかし、明文改憲に関し、自民党内の不一致は解消されていない。アベ首相は任期中の改憲を諦めることなく、憲法審査会の審議入りを画策している。そして、既成事実として、防衛費予算を増加し、6兆円を超える米兵器の爆買いをしている。反面、社会保障費は2013年以降、6年間で3.9兆円減少している。また、アベ改憲を「日本会議」が草の根運動で展開している。③「アベ改憲を阻止するためにはどうすればいいのか」戦争の兆候を見分けること、「ヘイトスピーチ」は戦争の根源である。権力内部の好戦派の「国益に反する」「弱腰」などの言辞と、これを煽るメディアの報道などによって良識派は沈黙に追いやられる。近づく戦争の足音を鋭敏な意識で聞き分ける。ドイツの牧師ニーメラーは下記のように警告している。「ナチ党が共産主義を攻撃したとき、私は自分が多少不安だったが、共産主義者でなかったから何もしなかった。それからナチ党は社会主義者を攻撃した。私は前よりも不安だったが、社会主義者ではなかったから何もしなかった。それから学校が、新聞が、ユダヤ人等々が攻撃された。私はずっと不安だったが、まだ何もしなかった。さてそれからナチ党は教会を攻撃した。私は教会の人間だったから何事かをした。しかし、そのときはすでに手遅れだった。」岡田弁護士は、政党は当然、自分の党の拡大を目指す。市民の共同行動が、野党共闘を実質的に生み出していく前提になると力説された。点の共闘から線につなげ、面へと広げていく。抑止力は、相手より強いことが求められるから、軍事力の強化をもたらす、戦争への危険が増す。声高な正義の押し付けは止めて、隣の人に解りやすく、控えめに話す方がいい。「そうですね」と受け入れてから、「しかし」と、静かに反論せよと説かれた。「明確な主張」「説得力ある言葉」「持続する志」そして「共に生きる精神」が必要である。私は、共に生きる平和こそが喜びであると信じている。これは、主イエスの福音の内実である。この喜びを共有する仲間を増やしていきたいと、九条の会に加わっている。